水のひろば
Water Square

カッパ伝説と川の街
埼玉県 志木市

水と緑、人と自然が調和した街

志木市は、埼玉県南西部に位置し、面積は9.06平方キロメートルと、市としては全国で6番目に小さな市です（国土交通省国土地理院「平成25年全国都道府県市区町村別面積調」）。

昭和45年10月に市制を施行し、首都近郊25キロメートル圏内で都心まで電車で20分という好条件から、現在も人口増加を続けており、住宅都市として発展しています。同時に、今なお自然や田園風景が残され、水と緑、人と自然が調和した街です。

新河岸川を泳ぐ鯉のぼり

舟運で栄えた商業都市

志木市には、市の中心を流れる新河岸川と柳瀬川、そして東を流れる荒川と、3本の川が流れ、志木市のシンボルとなっています。また、荒川には、昭和39年に水資源開発公団（現水資源機構）により秋ヶ瀬取水堰（志木市宗岡）が建設され、利根川から武蔵水路を通って荒川に導かれた水を、朝霞浄水場（東京都水道局）や大久保浄水場（埼玉県企業局）などへ送水する大切な役目を担うだけでなく、新河岸川や隅田川へ浄化用水も供給するなど、重要なインフラとして人々の生活を支えています。

志木の街は、新河岸川の舟運で栄えた商業都市であり、水との関わりが大変深い街です。荒川の支流である新河岸川は、古くは内川と呼ばれていました。寛永15年（1638）の埼玉県川越の大火で、日本三大東照宮の一つである仙波東照宮が焼失すると、これを再建するため江戸城紅葉山御殿を分解して移築することになり、その資材の運搬に内川が注目され、水路と河岸場が整備されました。新しく作られた河岸場であることから「新河岸」と呼ばれ、新河岸までの舟運が盛んになると、いつしか川の名前も新河岸川と呼ばれるようになりました。

新河岸川や荒川の沿岸には、数多くの河岸場が設けられましたが、その中でも特に柳瀬川との合流地点に作られた引又河岸（志木河岸）は、遠くは山梨県甲府などの物資が集散し、経済・交通の要衝の地として栄えました。

江戸期からはじまり明治初期に隆盛を極めた新河岸川舟運も、明治28年に川越鉄道（現在の西武新宿線）が開通、大正3年には東上鉄道（現在の東武東上線）が開通し、さらには、水害対策のため数度にわたり実施された河川改修により川の水位が低下し、船の航行が著しく困難と

なったことなどから、昭和6年に通船停止令が下され、約300年続いた物資輸送路としての役割を終えました。かつての引又河岸の面影は、その後の住宅化の進展によりその姿を偲ぶことは難しくなりましたが、新河岸川や柳瀬川のほとりには、たくさんの桜が植えられ、春にはこの桜を見物しにたくさんの人が訪れ、市民の心のオアシスとして今も親しまれています。

志木河岸へと向かう高瀬舟

秋ヶ瀬取水堰（荒川）

街中でカッパに遭遇！

3本の川に囲まれ、水との関わりが深い志木市には、昔からカッパにまつわる伝説が伝えられています。

「昔、人や馬に悪さをする河童が柳瀬川に住んでいました。ある日、その河童が、馬を川の中に引きずりこもうとして失敗し、村人たちに捕まってしまいました。そこに宝幢寺（ほうどうじ）の和尚さんが現れ、哀れに思った和尚さんが村人たちを説得し、河童を助けてあげました。すると、翌朝、和尚さんの枕元に、河童からのお礼なのか鮒（ふな）が置いてあり、それ以来二度と人や馬が襲われることがなくなりました。」

このお話は、江戸期の「寓意草（ぐういそう）」に収録された後、民俗学の第一人者である柳田国男の「山島民譚集（さんとうみんたんしゅう）」でも紹介され、全国的にも知られるようになりました。この伝説のほかにも、志木には川の街ならではのカッパの伝説が数多く語り継がれています。

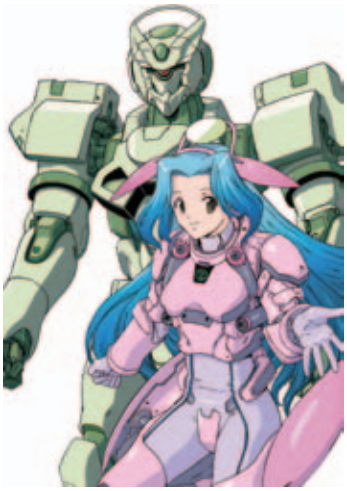
また、市内にはカッパ伝説をモチーフに作られた23体のカッパ像があり、それぞれに愛称がつけられ、市内外の人々に親しみと安らぎを与えているほか、（公財）志木市文化スポーツ振興公社の公式キャラクター「カパル」や志木市商工会キャラクター「カッピー」など、カッパの郷として愛嬌いっぱいのカッパたちが活躍しています。

カッパ石像「番太郎」

さらに、平成23年10月に突如、秋ヶ瀬取水堰付近に出現してお茶の間を賑わせたアザラシをモチーフにした「志木あらちゃん」も志木市を代表するご当地キャラクターとして活躍しています。

水とともに未来へ伝える

志木市では昨年7月に、水と緑、そして新河岸川・柳瀬川の桜に囲まれた市の魅力を市内外にPRするために、志木市観光PRキャラクター「4式（ししき）ロボ」と「いろは水輝（みずき）」を誕生させました。


志木市観光キャラクター「4式ロボ」と「いろは水輝」

このキャラクターは、10年ほど前まで志木市にアトリエを持ち、創作活動を行っていた漫画家で映画監督の松浦まさふみ氏がデザインしたもので、「4式ロボ」は、カッパのお皿や市章をモチーフに、「いろは水輝」は、川や桜をイメージしています。「志木は、水と緑と桜の美しい街だと思います」との松浦氏の言葉のとおり、志木の魅力を融合させたキャラクターです。

このように、語り継がれる伝説からロボットに至るまで、志木市にはたくさんの物語があり地域に根付いています。これからも、志木市のシンボルとして、水とともに地域の文化・魅力として大切に伝えていきます。